

広島平和記念資料館を見学して

高社中学校 3年 齋藤 耀



広島平和記念資料館には原爆が原因で亡くなった方などの遺品が展示されていました。鉄が溶けてボコボコになった自転車や、焦げて破れた服などの遺品を見て原爆の威力と悲惨さを感じました。しかし、原爆の脅威を感じられるのは遺品だけではありませんでした。そこには原爆の被害を受けた方の当時の写真も展示されていました。原爆の影響で目が潰れた人、ケロイドで苦しみながら亡くなってしまった人の写真を見て胸が苦しくなりました。こんなにも人を残酷に殺してしまう兵器があつていいのかと思ひながら写真を見

ていました。また、皮が剥がれて、肌に垂れ下がって水を求めている人がいたということも知りました。平和記念公園にはその水を象徴した噴水などが数多く作られています。

原爆の影響はこれだけではありませんでした。放射線の影響で白血病など命に関わる病気になってしまう人たちもいました。平和の子の像はそんな人たちに向けて、原爆の脅威を未来に伝えるために作られたのだと私は感じました。今でも放射線の影響で苦しみ続けている人が多くいることを聞き、こんなにも長く影響が続いていることに驚きました。原爆ドームはその原爆の威力を物語っていました。私は、原爆ドームが78年間もの間、自然災害などに耐えながら崩れずに存在し続けていることに感動しました。そこから、平和への願いを伝えてくれているようにも感じられました。広島平和記念資料館には、原爆の仕組みなどの詳細が説明



されたコー

ナーがありました。私たちは、原爆の仕組みがとても複雑であまり理解できませんでしたが、これだけの技術が人の命を奪うために発明されたと知り、かなりの衝撃を受けました。人間はすごい技術を生み出し、医療の向上や便利な生活に役立てています。そんな人類が、人を殺すためだけに技術を使い知恵を絞っていたと考えるととてもショックでした。

原爆は一瞬で14万人もの人々の命を奪い、多くの人に放射線によって深く長く続く傷跡

を残してしまいます。「そんなことはもう二度と起こしてはいけない」というメッセージを数々の原爆の被害にあった遺品を見て感じました。そのことを私たちが後世に正しく伝えていかなければいけないと改めて感じました。

ヒロシマ青少年平和の集いに参加して

高社中学校 3年 山田 遙慶

私たちは、8月5日にヒロシマ青少年平和の集いに参加しました。

そこではまず、中・高校生ピースクラブの人たちによる原爆の説明を聞きました。原爆が開発された経緯から、原爆による被害などについて詳しいことを知ることができました。そこで特に印象に残った言葉が、「人類は核兵器とは共存できない」ということです。無差別にたくさんの人の命を奪う核兵器の恐ろしさを後世に伝え、もう二度と原爆を使用しないようにしていきたいと思いました。

次に、原爆被害にあった笠岡貞江さん（90歳）にお話を聞きました。当時12歳だったという笠岡さんは、爆心地から3.5km離れた自宅で被爆しました。両親を原爆で亡くしました。当時、子供は勉強はできずに働いていました。建物疎開といって建物を壊す作業や、工場で弾薬を作る作業をしていました。ご飯は、茶碗一杯の麦ご飯とすまし汁だけでした。お腹が減っても「お国のため」にみんな頑張っていたそうです。

原爆が投下されると、一瞬で建物は壊れて熱線によって皮膚は溶けてひどい状況でした。建物の下敷きになった人は、助けたくても助けられず、生きたまま燃えて死んでいく子供達。まさに地獄のようだったそうです。たくさんの人が水を求めて川に向かいましたが、川に入っても自力で上がることができずに死んでしまったそうです。死んだ人はすぐに腐ってしまうからグラウンドで火葬しますが、人を燃やした時の匂いが、なんていえばいいのかわからない不快な匂いなのだそうです。「たくさんの人の命や夢を奪った原子爆弾はとても恐ろしいものです。原爆は人を不幸にし、良いことは一つもないです。一刻も早く原爆が消えることを願っています。」と話してくれました。

私がお話を聞いて、最も心に刺さった言葉が、「ここにいるみなさん全員幸せ」ということです。当時は、勉強をしたくてもできなかつたと言います。食べ物を好きな時にたくさん食べられなかつたと言います。今の私たちは、勉強ができて、好きな時に美味しいものを食べられる。お話を聞いて、確かに今私たちは幸せなんだなと感じることができました。それと同時に、原爆の恐ろしさを伝えていかなければならないと強く実感しました。

その後、「あなたにとっての平和とは」「なぜ核兵器があるのか」の二つのテーマについて、グループでディスカッションをしました。私のグループでは、まず自分で考えてからグループ内で考えを発表し合い、考えをまとめていくという方法で進めていきました。「あなたにとっての平和とは」という問いに対しては、「今当たり前にある普通の日常」という意見や、「かけがえのない今の幸せな生活」などの意見が出ました。次の「なぜ核兵器があるのか」という問いに対しては、「戦争を起こさないようにするための抑止力のため」という意見や、「権力や強さの象徴」という意見もありました。この二つの問いに答えはないと思いました。しかし、この問いについて深く考えて、他者と考えを共有し、自分の意見をもつことが大切なのではないかと考えました。

このヒロシマ青少年平和の集いに参加してさまざまのことを学びました。特に、原爆の恐ろしさをよく知ることができました。しかし、このことは知ることがゴールではなく、しっかりと伝えていくことが大切だと思います。原爆は、この世界にあってはいけません。原爆を一刻も早く世界から無くすことが、私たちのすべき最大の課題だと感じました。



平和記念式典に参列して

高社中学校 3年 平野雄人

私達は、8月6日の原爆死没者慰霊式、並びに平和祈念式に参列してきました。普段はテレビなどのニュースで見ただけなので、実際に現地で記念式典に参列できたことはとてもよい経験となりました。黙祷の時間では「誰もが奪い奪われることなく笑顔で暮らせる平和が続きますように」と願い、1分間の黙祷の時間を共有しました。



平和記念式典では、広島市長による平和宣言、広島市内の小学生による平和への誓いなど、平和への想いを聞きました。広島市長が「核兵器を保持する国の指導者達に被爆地を訪れ自らの目で耳で被爆の実相を知る努力をしていただきたい。多数の人々の命の重さをこの地で感じてもらいたい。」と訴えており、私も広島市長がお話されたように、被爆地に自ら訪れて自分の目で実際に見て、戦争の爪痕を肌で感じる事が大切だと思いました。「平和への誓い」では、広島市内の小学生が自らの言葉で訴えていました。その中で最も印象に残ったのは、「被爆者の思いを自分の事として受け止め、自分の言葉で伝えていく」という言葉です。それは、原爆による悲惨さや苦しみを理解した上で、平和な世界をつくるために自分にできることを考え、行動していくことだと思いました。大変難しいことだと思いますが、とても大切なことだと思いました。このような宣言を聞き78年前の悲惨さや苦しみを、二度と繰り返してはならないことだと再認識しました。

その後私達は、「ひろしま子ども平和の集い」に参加しました。そこでは、被爆体験講話があり、梶本淑子さん（92歳）に当時の体験談を絵などを使用して語っていただきました。私が1番印象に残ったことは、梶本さんが「みなさんの考え次第で戦争のない世界にできるか原爆のない世の中にできるかが決まってきます。行動を起こしてください。知恵を出してください。」とおっしゃっていたことです。「これから平和な世界をつくっていく上で、原爆被害の実相や悲惨さなどをまだあまり知らない人や、子ども達に伝えていって欲しい」という未来を生きる私たちへのメッセージとして解釈し受け取りました。



実際に原爆被害にあわれた梶本さんのお話をお聞きして、原爆は街を破壊し人々の命を脅かすだけでなく、人の心までも奪っていくということもわかりました。原爆の被害にあわれた方が「どうして自分だけ生き延びたのだろう」と原爆のせいで自分を責め、苦しい思いをしている人も多かったそうです。こんな思いを2度と繰り返さないように、私たちは梶本さんからお聞きしたことを私達の言葉で、地域や学校の皆さん伝えていきたいと思ひます。